コラムⅣ

悟後修行の風光

——清沢満之と證空——

中村玲太

まったく関係ない。あらかじめこう断っておいた方がよいだろう。清沢満之の思想に、法然の上足であり西山義の祖となる善恵房證空（一一七七～一二四七）の影響があるなどと言うつもりはない。しかし、「法然（あるいは仏教他力門）という共通の土壌のうえで西山教学と真宗教学とを照らし合わせ、時には衝突させることにより、双方に新たな読解の可能性」を開いていくことは可能である。当然この時には、西山教学＝證空、真宗教学＝親鸞、が真っ先に思い浮かぶ。だが、證空と照合・対峙する真宗教学として無視できないのが、実は清沢満之である。特にぶつかり甲斐があるのが、信仰と修善の関係である。「双方に新たな読解の可能性」のあることを念じて、しばし證空と清沢を往復してみたい。

自力無功の自覚において、自らが修した諸行をあてにして往生しようとする、いわゆる「諸行往生」の立場に立たないとすれば、自己の信仰に修善は無関係なのであろうか。勿論、そういう思想もあり得るが、證空も清沢もその立場に与しない。ここが證空、清沢の魅力であるが、誤解される要因でもある。他力に任せておけばこの身このままで何をしても許されるのか、という問題についてまずは清沢から。清沢は『臘扇記』において絶対無限への乗托を語るなか、その自覚内容として「避悪就善の天意を感ず」とし、ここに道徳の源泉を見ている（『清沢満之全集』第八巻、岩波書店、二〇〇三年、三六三頁、以下、『清沢全』）。

次に證空であるが、「弥陀の願に相応して悪を退き、善に順ずる心ありて、而も善悪の為に進み退く心なくして、決定往生の信をもて行ぜよと云ふなり」（『観念法門自筆鈔』巻下、『西山叢書』四、一四四頁、以下、西叢）とする。なお、證空における「決定往生の信」の自覚内容をよく表したものとしては、「我身に出離の縁ありと信ずれば、往生不定なり。出離の縁なしと信ずれば、往生決定して疑なし」（『散善義他筆鈔』巻上、西叢六、一〇七頁）という語が挙げられる。悪をなせば流転の苦から逃れられないと不安になるのは他力の信ではない。不安にならずとも出離の縁などもとよりない。弥陀の本願に照らされてこうした我が身を知る「決定往生の信」においては、「善悪の為に進み退く心」に悩まされることはない。この信の上で、つまりは仏願に相応したところに「悪を退き、善に順ずる心」があると證空は言う。

ここで證空は「善に順ずる心」とするが、何より注意すべきが諸善の捉え方である。

> 道理を悟りて、一切の善の体、弥陀の功徳より出でて、一法として空しく過すべき法なかりけり、と悟る心を離れて西方の道通ふべからず。
>
> （『往生礼讃自筆鈔』巻四、西叢三、一〇六頁）

證空思想の難問中の難問が、この「一切の善の体、弥陀の功徳より出でて」という理解についてである。「善」に「善」としての息吹を吹き込むのは「弥陀の功徳」なのであり、「弥陀の功徳」である以上、すべての善においても「空しく過すべき法」などない。故に「善に順ずる心」も生起されると言えようか（さらに言えば、自己に功徳などないという自覚があればこそ「弥陀の功徳」にも向かうのである）。もっと綿密な検討は必要であるが、いずれにせよ煩悩具足の凡夫における修善が、空しく終わらない根本原理を「弥陀の功徳」に見いだしたのが證空であり、仏教他力門に新生面をもたらすものだったと言えよう。

さて、話は清沢に戻ろう。清沢における具体的な信仰と修善についての思索において、證空思想から注目せざるを得ないのが「信仰と修善と交互に刺戟策励」するという言明である。『臘扇記』には次のようにある。

> さて此の如く他力を信ぜば、修善は任運に成就され得べしと放任すべきかと云ふに、決して然らず。吾人は他力を信ぜば益々修善を勤めざる可からず（是れ信者の胸中に湧起する自然の意念たるべし）。而して修善を勤めんとせば、又従来の自力的妄念の紛起するを感知せん。是れ却て愈々他力を信楽するの刺戟なるべし。

此の如く信仰と修善と交互に刺戟策励して以て吾人を開発せしむるもの是れ則ち絶対無限なる妙用の然らしむる所、豈に讃歎に堪ゆべけんや。

（『清沢全』八、三六六―三六七頁）

他力を信ずれば何を心配せずとも修善が成就される、などという楽観的な発想は清沢にはない。修善に励もうとするからこそ、「従来の自力的妄念の粉起するを感知」する。何かを掲げて「よいこと」をしていると思っているときほど危ういものはない。信仰と修善の場合で言えば、修善を「悟後修行の風光」として意味づけようとする思いは、ともすれば他力の名のもとに自己の行為を正当づけようとする心と紙一重であり、ここに危うさがある。踏み込んで解釈すれば、自己を省みずに「自分はまっとうなことを成し得ている」という思いこそ「自力的妄念」と言えよう。そして、自力ではこの「自力的妄念」自体を感知し得ないのであり――感知し得るのであれば「自力有功」であろう――、「従来の自力的妄念の紛起するを感知せん」という自覚と他力への乗托は表裏一体である。自己にこびり付いた「従来の自力的妄念」が抉り出されるところに他力を信知するのである。

信仰から修善への方向性はともすれば危うさを孕むものであり、常にその修善を点検する視点が必要である。勿論、他力の信に立てば必ずその視点があるはずである。勿論、證空の修善論は、自力無功の自覚より展開するものであるから、清沢と同じ考えを有していたと考える。しかし、證空自身に言明はないのであり、證空思想の魅惑と危うさを考える一つのヒントとして清沢の言説は大いなる刺戟である。

信仰と修善をめぐって、約七百年の時の差をだいぶ荒っぽく行ったり来たりしてしまった。これが単なる往復運動ではなく、「双方に新たな読解の可能性」を開くために少しでもスイッチバックのように前進していたと信じたい。

ISSN 1347-4316

TODAY AND SHINRAN

No. 33

Special Edition Kiyozawa Manshi Studies —— Past, Present, and Future

CONTENTS

On the Publication

Opening Articles

Dynamic Shinran Doctrinal Studies:
The Ideas Kiyozawa Manshi Left for Future Generations ····· HONDA Hiroyuki

Section 1 The Trajectory of the Society for Kiyozawa Manshi Studies

The Skeleton of Kiyozawa Manshi:
Focusing On *The Skeleton of a Philosophy of Religion* ····· TAMURA Akinori
Taking Refuge in the Buddhism of the Gate of Other Power (*Jōdo Shinshū*):
The Existential Significance of *Draft of a Skeleton of a Philosophy of the Gate of Other Power* ····· ITO Eshin
Reading the *Rōsen-ki* ("December-fan"): A Turning Point for Kiyozawa Manshi ····· NAWA Tatsunori
Reading the *Yūgen mugen-roku* ("Records of the Finite and Infinite"):
The Meaning of "Public" and "National" ····· YAMAMOTO Nobuhiro
Kiyozawa Manshi's Responses in the "*Seishinkai* Articles" ····· HARUCHIKA Takashi

Section 2 Contributing Article

Nishida Kitaro's "Philosophy of Religion"
and Kiyozawa Manshi's "Philosophy of Religion" ····· SUGIMOTO Koichi
Inoue Enryō and Kiyozawa Manshi: Modern Japanese Buddhists ····· MIURA Setsuo
"Heaven" and "Public": Confucian Thought Elements in the Work of Kiyozawa Manshi ··· KOYASU Nobukuni

Section 3 Carving Out the Future of Kiyozawa Manshi Studies:
The View from The One Hundredth Anniversary of His Death
(Report on The First "Kiyozawa Manshi Studies Exchange Forum")

Proposal I Attempting to "Restore" Kiyozawa Manshi ····· YAMAMOTO Nobuhiro
Proposal II Tenno State and "*Seishinshugi*": With a Focus on Kiyozawa Manshi ····· KONDO Shuntaro
Proposal III The "Excavating" of Kiyozawa Manshi:
Rōsen-ki as a Cross-section ····· NAWA Tatsunori
Proposal IV The Background of and Issues in the Editing
of *Kiyozawa Manshi's Complete Works* (ed. Otani University) ····· NISHIMOTO Yusetsu
Discussion——A Place for Sharing Different Areas of Kiyozawa Manshi Research
····· Commentator SUGIMOTO Koichi
Coordinator TAMURA Akinori

Section 4 Columns——The Prism That Is Kiyozawa Manshi

I Acutely Practical Thinking: Kiyozawa Manshi, Modern Japan's Greatest Philosopher (KOSHIBE Ryoichi)/ II Electrification and Friction: Kiyozawa Manshi and Soga Ryojin (FUJIWARA Satoru)/ III The Artist Who Painted Kiyozawa Manshi: Nakamura Fusetsu and that Era (OSAWA Ayako)/ IV The Landscape of Post-awakening Practice: Kiyozawa Manshi and Shoku (NAKAMURA Ryota)/ V Existing as the Big "Self": D.T. Suzuki's Kiyozawa Manshi (GRACE Stefan)/ VI The Limits of Reason and the "Unknown Reality": Kiyozawa Manshi and Herbert Spencer (HASEGAWA Takuya)

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES

June 2016

現代と親鸞

第 33 号

特集　清沢満之研究の軌跡と展望

刊行にあたって ····· (2)

巻頭論文

躍動する教学——現代に向かって清沢満之が投げかけた課題—— …本多弘之 (5)

第一部　清沢満之研究会の軌跡

満之の骨格——『宗教哲学骸骨』を中心に——……田村晃徳 (18)
他力門仏教に帰す——「他力門哲学骸骨試稿」の実存的意義—— …伊東恵深 (44)
『臘扇記』を読む——清沢満之における転換期—— ……名和達宣 (70)
『有限無限録』を読む——「公」とは、「国家」とは——……山本伸裕 (98)
「『精神界』論文」にみる清沢満之の応答性 ……春近敬 (124)

第二部　寄稿論文

西田幾多郎の「宗教哲学」と清沢満之の「宗教哲学」……杉本耕一 (150)
井上円了と清沢満之——日本近代の仏教者—— ……三浦節夫 (172)
「天」と「公」と——清沢満之における「儒家的なもの」—— ……子安宣邦 (201)

第三部　清沢満之研究の〈可能性〉——没後百周年から見えたもの(第一回「清沢満之研究交流会」報告)

提言Ⅰ　清沢満之「復権」の試み ……山本伸裕 (212)
提言Ⅱ　天皇制国家と「精神主義」——清沢満之を中心に——……近藤俊太郎 (231)
提言Ⅲ　清沢満之の〈発掘〉——『臘扇記』という一断面—— ……名和達宣 (251)
提言Ⅳ　大谷大学編『清沢満之全集』編纂の背景と課題 ……西本祐攝 (271)
討　議　異領域からの清沢研究が交わる場所 ……コメンテーター 杉本耕一 (294)
司会 田村晃徳

第四部　コラム集　清沢満之という多面体（プリズム）

コラムⅠ　激切なる実学——近代日本最高の哲学者・清沢満之——(越部良一)／コラムⅡ　感電と摩擦——清沢満之と曽我量深——(藤原　智)／コラムⅢ　清沢満之を描いた画家——中村不折とその時代——(大澤絢子)／コラムⅣ　悟後修行の風光——清沢満之と證空——(中村玲太)／コラムⅤ　大きな「自分」としての存在——鈴木大拙にとっての清沢満之——(ステファン・グレイス)／コラムⅥ　理性の限界と「不可知的実在」——清沢満之とスペンサー——(長谷川琢哉)
····· (316)

親鸞仏教センター

2016年6月